

かちく山

小笠原考次

前号で紹介した「桃太郎」の解説を讀んで... 新しき人々の人が國体神道の意義に關心を...

意の神、ではければ國体神道の門に入ることは不可能である。

また眞理を眞理であることの現実の証據を見せなければ... 眞理は存在するものではなくして、自証...

「言の葉の道」に對して嚴戒の態度を取らうとする人々... 眞理を眞理とする人の自己宣傳であるが...

はならぬと、敵に出会った時の猿や鶴の様は... 彼等の古い地位や境界を擁護するためには...

然し表面の意識はどうかあらうとも、人類の... 眞理の意識は、教團の説いた正徳永三十年の...

何時しか消え去ってしまったか... 何事も心に思ふた、その夢野の意味を...

大に聖き物を祀る物れ、勝に眞珠を授け... 天照大御神の御宮田の原(葉)を撒き散らす...

昔々、ある所に翁と孫とが居た... 家にて寝た時に、お爺さんの留守の間...

取つて、二匹が天を飛んで来た... 山へ来た時に、お爺さんがお孫さんを呼んで...

狸が穴に籠つて唸つてゐる所へ、鬼が葉巻を盗つた。そのために狸は更に苦しんだ。鬼と狸とが連れ立って海へ魚を獲りに行くこととなつた。鬼の船は木の船である。狸の船は泥船である。沖へ出ると泥船は溶けて滅んで、狸は溺れて死んでしまつた。鬼は首尾よく敵討ちが出来たことをお爺さんに報告した。めでたし。

と言ふのが此の物語りの筋である。この話にもまた同じく菅原道実の作と言はれる。「桃太郎」と同じく「吉原の誠の道」の原理を以てすつきりと叙くことが出来る。叙けたことの了解がつかうたら、「吉原の誠の道」の意義を認識し、その権威を信じて頂きたい。そしてその信の上に立つて、天皇の御体である國体神道を究明し宣揚する道に協力して下さることを繰返し讀者諸君にお願ひする。

先づ六つの伝説の全部がさうだとは限らないが、この「かちく山」のお爺さんとお婆さん、桃太郎の話しと同じく伊弉諾、伊弉美二神の話しと解する事が出来る。然し「かちく山」の話しは「桃太郎」の様に神代の話まりからのことではなくして、すつと降つた上古から近代に至るまでの草柄である。すなはち神武天皇以後に起つた事に關する話であるから、此の場合に於ける伊弉美二神は宇宙創始の造物主といふ様を純粋な意義に解さなくともよいのである。此の場合にお爺さんとお婆さん、天皇の御事、お婆さんはお爺さんの天皇の御事である言ひ、誠の道を説明する學問であり、またその道を研究し実現する

狸が穴に籠つて唸つてゐる所へ、鬼が葉巻を盗つた。そのために狸は更に苦しんだ。鬼と狸とが連れ立って海へ魚を獲りに行くこととなつた。鬼の船は木の船である。狸の船は泥船である。沖へ出ると泥船は溶けて滅んで、狸は溺れて死んでしまつた。鬼は首尾よく敵討ちが出来たことをお爺さんに報告した。めでたし。

狸が穴に籠つて唸つてゐる所へ、鬼が葉巻を盗つた。そのために狸は更に苦しんだ。鬼と狸とが連れ立って海へ魚を獲りに行くこととなつた。鬼の船は木の船である。狸の船は泥船である。沖へ出ると泥船は溶けて滅んで、狸は溺れて死んでしまつた。鬼は首尾よく敵討ちが出来たことをお爺さんに報告した。めでたし。

狸が穴に籠つて唸つてゐる所へ、鬼が葉巻を盗つた。そのために狸は更に苦しんだ。鬼と狸とが連れ立って海へ魚を獲りに行くこととなつた。鬼の船は木の船である。狸の船は泥船である。沖へ出ると泥船は溶けて滅んで、狸は溺れて死んでしまつた。鬼は首尾よく敵討ちが出来たことをお爺さんに報告した。めでたし。

狸が穴に籠つて唸つてゐる所へ、鬼が葉巻を盗つた。そのために狸は更に苦しんだ。鬼と狸とが連れ立って海へ魚を獲りに行くこととなつた。鬼の船は木の船である。狸の船は泥船である。沖へ出ると泥船は溶けて滅んで、狸は溺れて死んでしまつた。鬼は首尾よく敵討ちが出来たことをお爺さんに報告した。めでたし。

日本の学者や政治家のことと一應あつと編輯して置いて筆を進めるとする、その理由は設々に判つて来る。

「かちく山」の物語りは先づ或時が爺さんが狸を一匹捕へて来たところから巻頭が始まつてゐる。狸と鬼が此の話しの主人公である。先づ狸の御教から筆を染めて行かう。均も狸(タヌキ)は田拔きであり、その田拔きはすなはちマミ(狸)である。突然こんな事を言ひ出すと突如に思ふだらうが、呪文といふものは面白いものである。日本の國の皇神、天照大御神は田を作つていらつしやる。その田を御宮田(ミツクダ)といふ。その田は言葉で出来てゐる。この田の名を裂口代(サツクハロ)伊勢五十鈴宮とも言ふ。裂口代とは鈴の祝言である。人間が言語を發する器官である口は下度鈴の様な二つに裂けた形になつてゐる。鈴は口の象徴物(代)である。その裂けられる音の種が五十鈴宮である。この五十鈴宮をまた天照大御神(高天原)音圖とも言ふ。あるものは太麻呂とも言ふ。

天照大御神はまた伊を綴つていらつしやる。この伊を神御衣(シン)といふ。織に空間の体系をアイエオウ五母音に取り、横に時間の展開をアカマヘラナサの八父音に取つて、此(縦横の糸(イト・五十))を綴りなした伊を以て、天皇と及びすべの正しき日本人が着るところの心の裳を作る。この縦横に計の着る音圖を幾何学的に見れば田の形になつて

神者の言ふ如く「諸法実相」であつて、如何なる思想、如何なる思想でも生命の存在と幸福の頭はれてないものは無いのであるから、すべてが眞實(マミ)であるには相違ないのだから、お爺さん、お婆さん、天皇の御事、お婆さんはお爺さんの天皇の御事である言ひ、誠の道を説明する學問であり、またその道を研究し実現する

お爺さんはこの様な意味の狸を何處からか一匹連れて来たのであつたが、狸はもとより野郎であるから勝手に暴れ出されては困る。總て纏つて庭の隅に置いて置いた。その狸には言葉の田の無い思想であり、お爺さんは日本の天皇であるとしたら、お爺さんは何時頃かして何處から此の様を狸を日本の國へ連れて来たのであろうか。それは歴史の上からはつまり言へば神武天皇以後から天照大御神天皇の御事の前後までの事であつたことが考へられる。印度に釈尊の御教が生まれ、天竺に孔子、老子の御教が興つたのは我が神武朝と相前後してゐる。爾末天照大御神に至る六百年間に一帯帯水の大陸からこれ等神の御教が日本に輸入されたことはない。朝廷が正式に此の二教を採用したことは遙か後世のことであるが、神武朝以前既に二教は日本の民間には充分浸潤してゐた筈である。天神神に起つた國の激しい思想的混乱の原因は此の二教の流行によるものであることと判断される。佛敎にせよ神敎にせよいづれも言葉の洪流を保持した思想である。もとより佛敎は「色即

空」の色の教へ、「いろは」の教へであつて、色としての生命の色相を「三十二相、八十種好」と説き、菩薩の妙色身を「五十種の色、五十種の光」なりとまでは説いてゐるが、その三十二相、八十種好を、五十種の色と光を時間と空間の範疇に於て如何に配列したならば佛敎の眞實を顕はすことが出来るか、そこで私は説いてゐない。時間空間の時置師と位置師の法のない佛敎は明かに因としての洪範の無い田拔きの思想である。

また佛敎にしまからが、老子は三数の理を説き、易経では五数の理と八数の辰相を説いてゐるが、太極・四象・乾巽離震爻辰坤を如何に時空の上に展開したならば易の世の政治経済体制を顯はし得るかまでは説いてゐない。神農農家易書として没すのである。佛敎もまた田の洪範を飲除する田拔きの思想である。斯うした大凡二種類の狸が神武天皇の所謂建國の時期を境として陸續として日本へは入つて来たわけであつた。は入つて来た理由は日本人が斯うした新奇の思想を好んで迎へ、争つてこれに投じたからであつた。日本人が舶来の物質や外國思想を尊重し嗜好する習慣は既に此の頃から顕著であつた。神武天皇は此の風波を御覽になつて建國の國是を次の如くに定められた。

夫れ、大人の制さ立つるや、義必ず時に隨ふ、苟も民に利有らば何ぞ聖道に妨はるる言(平書紀)

(衣御) 田 管 行

ア	イ	エ	オ	ウ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
チ	チ	チ	チ	チ
リ	リ	リ	リ	リ
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
ノ	ノ	ノ	ノ	ノ

宇宙萬物の本質は光りである。光りが客觀世界に結ばれて電子となり原子核となり、やがて原子が生まれて来る。その原子が結ばれて複雑多岐の物質となる。斯く説いて来るのが科学である。宇宙生命の本質は光りである。その光りが人間の頭腦の自覚のうちに結ばれて、天名(マナ)となり、

天名(マナ)となり、神名(假名・言語)となつて發せられるものが人間の心(思想・心・精神)の自己表現であるところの言語である。斯く説くのが高御產靈日之國體神道である。科学は光と結んで物と造る道である。國體神道の言の葉の誠の道は光りと結んで神(思念・思想)を生み出す道である。兩者全くその軌道を一にする。物と心とは唯一生命の両面であり、唯一事物の裏と表の關係にある。物のない心はない、心のない物はない。心のない物の心を考へることは生命のない觀念に過ぎない、物のない心のみを考へることもまた具體性のない觀念である。物が作られる如くに心が組立てられる。心が組立てられる道さして同じく物が創られる。若し此の二つの道に矛盾があるなら、物と心とをその表裏とする物語が物事として成立し得ない。天名(マナ)とは母音と父音である。科学

なる。然し、是れは未だその、当分の間は自由を許さず、定先に見つて置いた。月讀の國の外國の異教の輸入は許したものの、國民間のみに止めて置いて公の取扱ひはしなかつたのであつた。

ところが、お節さんはお田のこと狸を度先につないで置いたまま何かの事でお出先して家を留守にした。このお節さんの外出と言ふことは、神天皇の御守に於ける神鏡の同床共殿遷止の儀を意味すること取るべきである。お節さんは天皇であり、天皇の本質は言靈の八咫鏡であるから、八咫鏡が宮中から奉遷されたことは、お節さんが家を留守にしたことと考へてよい。お節さんが外出した先は大和笠懸宮であり、やがて伊勢五十鈴宮であるわけである。同床共殿の遷止は和光同塵の實踐のためである。神鏡の光りを知らしめ、異教の塵を被ることは神武天皇の國である民利の然る所、民心の趨く所に従ふためであつた。

ところが、お節さんが留守になつたことを幸にして、狡猾な狸はお節さんをうまく騙して縄を釈いて貰つた。すると自由になつた狸はいまなりお節さんに飛ぶかかつて殺してしまつた。それからお節さんの肉を刻んで料理をして汁を作り、骨を流して捨てた。そして狸自身がお節さんに炊けて待つてゐる所へお節さんが帰つて来た。前述の如くお節さんは日本々末の学園であり、その学園を取扱ふ学者や政治家のことであるから、このお節さんと狸との間に起つた惨劇は、同床共殿遷

X

道と殊に佛教との間の極めて複雑な因縁を語るものであつて、そのために先づ「汁」と言ふことから叙いて行かう。

御酒は懸の上高知り、懸の腹満々雙々、汁にも類（カヒ）にも……平けく聞し召し……（道徳祭詞）  
と祝詞で言はれてゐる。前々号で明かにしたやうに宗教の祭事は、殊に神社神道の祭典はすべて神をあらはす祀事である。祝詞の文章も全部が呪文である。「聞し召し」と言つたことは供へられた汁や類（カヒ）を神に口を聞かして、食べさせるわけではない。聞し召しと言ふことは元未食べることはなく、言葉を耳で聞かして、汁（カヒ）は知るの祀事、類（カヒ）は書（カ）（カ）すなはち言語と書き、類はした文字のことである。すなはち「汁」にも類にも聞し召しと神理を言葉と文字を以て示し現はすから、それを聞し召しなはし給へと言ふことである。斯くて汁とは田技の類（カヒ）であつて、それは佛教僧教を研究し理した知識学問といふこと他ならぬ。元素のはじめお節さんが狸を捕へて来た目的は、これを解剖料理して汁にして、その味を試食するためであつた。ところが、お節さんに炊けた狸が狸汁と言つてお節さんに勧めた料理は本物の狸汁ではなくして、お節さんの肉であつた。この物語の縁を次のやうに叙けばはつきりするだらう。元素佛教や儒教の教理といふものは、佛教や儒教それ自体から出てゐるものではなくして、日本の古の昔の道が、と言ふよりは古く昔の道が、と世界に行はれてゐるエロブス（言葉）の道を、そ

止以後の日本國内に於て佛教僧教等の友思の國の思想が、清時日本々末の古の葉の道（國體神道）に取つて代つた歴史のないまじつた。象徴的叙刺したことを叙くことが出来る。改めて説くまでもなくこの間様々な歴史の

互悲劇や紛争が相次いだ。あるひはそれは蘇我馬子と物部守屋の紛争である、あるひは聖德太子と漢の直駒との葛藤である。その結果物部家は滅亡し、聖德太子は御年若くして薨去された。神道の仲間には聖德太子が佛教徒であつたことを批難する者が多く居るが、この様な批難は神社神道を観念的に信仰するのみで、眞の國體の本教が如何なるものであるかを辨まへぬ感情論から来す。太子は同床共殿遷止後の日本に於て神佛の三教を修め、三國の由來に通じて居られた聖者であつた。當時勅令したる神鏡の鏡像を仰へて、國體神道の本質を佛教を通じて教伝し保存する方途に腐心されたのである。

だが然し上古、中古の日本の思想界の大勢は既に神武建國の当初に於て民主（民利）主義に則すべき方針が定められたものであり、更には神朝に於ける同床共殿遷止によつて此の國體が決定されたものとなつてゐるから、神武以來の日本の正統の思想家達の必死の抵抗にも拘らず、時代の風潮と學界、宗教界の趨勢は赴くべき所に赴かなければならなかつた。お節さんは狸のためにあへない最後を遂げたのである。

斯くて降つて奈良朝のはじめ、聖武天皇の御守には初禪によつて都に東大寺が建立され、その本尊毘盧沙那佛の像が鑄造された。の本末の生輝を神即言葉である状態から離れて、教や概念や、六度である漢字や以て、観念的に説明した学園である。換言すれば口ゴスの言葉を口誦命が自己の特性経験官に寫して、眞実の太陽の姿を空した眞知の月として、眞實の世界に教化した学園である。故にその佛教や儒教を料理し研究整理した狸汁を食べることに似て、言葉の田の無い狸汁の学園を食へることに似て、斯くてその根元が天皇の如食する葉の道から出たのである。日本々末の習俗を、すなはちお節さんの肉を味はかすに似てゐるのである。これはまことに奇妙なことの様に思えて、究は當然なことである。此の故に聖武天皇を始め、平城平安の歴史を築つて佛教の繁盛を計られた。狸汁がそのまじの狸汁であるならば、價値のない事であるが、狸汁が狸汁でなくして実はお節さんの「ははあ汁」であるところに日本人に取つて佛教や儒教（乃至キリスト教）が飲べからざる重要意義を持つて来るのである。日本人が佛教や儒教やキリスト教を学ぶことは結局日本々末の國體神道を、すなはち世界人類に共通普通の道である言葉の原理を学ぶことになることを併へなければならぬ。斯くて狸の肉と思つて学んで狸汁の学園が、日本のお節さんの学園であつたために、これによつて國體神道の殿堂内に深く浸入し得た人々は歴史を動かさない。前号で叙した弘法大師はもとよりその一人である。此の物語りの作者は後へられる菅原道定然り、隆つて日蓮然りである。神鏡の同床共殿遷止以後、國體神道の言葉の葉の道は顯はには説かれ

X

毘盧沙那佛は六日如來である。六日如來は佛教として説かれた天照大神である。同じしのであるには相違ないが、何時の間にか神代假名文字を書き連ねた言語の流儀であるべき八咫鏡が青銅の金佛に炊けてしまつた。しかも此の金佛は勸修寺の本尊であるからには、当時の宗教と学園の最高の目標であつたわけである。狸がお節さんを殺して、お節さんに炊けたといふことの眞相を大凡右の様な歴史的事実と解したら肯づくことが出来るだらう。

お節さんが帰つて来た時、お節さんに炊けた狸は狸汁と言つて、お節さんにお節さんに汁を食はせさせた。お節さんがそれを食べ終るのを見済ますと、狸は忽ち正体を現はして「流しの下の骨を見ろ」と悪口を吐きながら、山へ逃げて行つた。お節さんが驚いて流しもどを見ろと、お節さんの骨が傍らに捨ててあつた。  
坂で次にお節さんが外出先から家へ帰つて来たといふことは、八咫鏡が宮中に再び戻つて来たことではなくて、日本の國に永久的な都が定められて、奈良に、また京都に長く天皇がお遷しになつたことと解釈してもよいだらう。その時はもう狸の思想はすつかり日本を代表する思想になつてゐた。すなはち狸がお節さんに完全に炊けたことにはなる。お節さんに炊けた狸が、狸汁と言つてお節さんに、お節さんの肉を食べさせたと言ふことには複雑な意味がある。これは日本國體神道と



すはち天之神中主神の内容の分裂的發展ある  
ひはその分析的研究所の學問といふ意味に在る  
のであるが、然らばそれは一体如何なる學問  
であるのらうか。

X

時既に末法の世の或日のことである。兎  
が狸を訪ねて、一緒に山へ柴刈りに行くこと  
を誘った。二匹は連れ立って山へ出かけて行  
った。二匹とも夫々刈った柴を背中に負って  
帰る道にさしかかった。狸が先に山路を降  
りて行く。兎が後から従いて行く。その時狸  
のうしろで「カチ／＼」といふ音がした。兎  
が燧石と鋼をたたき合せた音である。狸は振  
向いて「今のは何の音だ」と兎に質した。兎  
は「これはカチ／＼山だからカチ／＼とい  
ふ音がする」と答へる。そのうち狸の背  
中に火がついた。狸が焦めた柴が燃え出した。  
そのため狸は背中に大火傷を負った。これが  
兎の敵討ちの第一回目である。

兎が狸を柴刈りに誘つたのは柴刈りの競争  
をするためであつた。その山は狸が住んで  
る山ではなく、その昔「桃太郎」のお爺さん  
が柴刈りに行った山である。またその柴も  
お爺さんが刈った柴と同じ柴である。それは  
シ(至)バ(葉)と言ふことで、言葉(ロゴ  
ス)のエッセンスといふ意味である。そこで  
柴刈競争といふことは兎と狸の學問比べ、術  
比べといふことである。狸は狸で狸独自の學  
問理論を刈り集めて背中に負つてゐる。たと  
へばそれは佛教の世界だけを例にして、曰く  
「大東起信論」、曰く「十住心論」、曰く

科学者兎のたのには火傷を負はされたのであつ  
た。

X

火傷をした狸は穴に籠つて喚んでゐた。そ  
こへ兎がまた訪ねて来た。今夜は兎は葉を  
刈りつけて来た。さうして火傷の妙薬と偽つて  
狸の背中に「唐辛子」を塗つた。そのため  
狸の背中は更に激しい炎症を起して数層皮も  
痛み出した。これが兎の第二の敵討ちである。  
兎は物事をすさまじく生み出す神である。須  
佐之男命の化身である。須佐之男命は皇(ス  
サヒ)ける神であるから、此の兎は伊弉  
諾大神であり天照大神であり天皇である  
ところのお爺さんのために、その俳優(ワザ  
オキ)となり役人(エダシ)となつて忠誠を  
盡すことがその天賦である。科学の兎が日本  
の天皇を佐ける道は、その有製(ウツ)  
問である科学そのものを以てするのである。  
科学こそ末法の世に於て天皇の意を、すな  
はちその知食(チク)の道(ロゴス)の學問の  
意義を証明する學問である。すなはちその昔  
日本の上古時代に於て殺されたお爺さんであ  
る日本の正統の學問の敵討ちをする意味に於  
て、日本國体の物的証明と身を守るための人類  
正統の學問である。兎の敵討ちは時代が進む  
に従って益々深刻になつて行く。  
兎が葉を刈りつけたといふことは如何なるこ  
とに當るだらうか。ここから先は叙いて行か  
う。

この御酒は、吾が御酒をらす、酒(カシ)  
の上、常世にいます。石立たす、少名御神

「唯心論」、曰く何々と一々枚巻に暇がない。  
然しこれに對して須佐之男命の天運金木の思  
想の發展であり、しかも大國主命のお師匠と  
も言ふべき稻葉の白兔の兎にも兎独自の理論  
がある。その兎の理論は末法の世が愈々末法  
の相を如実に現はして暮れて行くことは天  
討に、時代が末法の世を降れば降る程、兎が  
刈り集めるロゴスの柴は質量ともに向上し増  
大して行くものである。

斯うして柴を背負つて前後して歩いて行く  
間に、兎が火を鑊も音「カチ／＼」と聞え  
た。これは此の物語りの山とも言ふべき面白  
い所である。「カチ／＼山」のカチとはカチ  
の子(道)といふことである。そこで「カチ  
／＼山」とは神の道(ロゴス)を研究する場  
所と言ふことになる。即ち兎と狸が知慧比  
術比べをする場所がすなはち「カチ／＼山」  
である。神の道の山に分け入つてロゴスの柴  
を刈り集める競争をしたのである。  
「カチ／＼山」で兎が燧石を搦つて火を用  
ひたといふことは人類の文化史上此の上なく  
重大な事柄の一つである。そこで兎の正体を  
明かしてしまへば、もはや諸君も既に兎が付  
いて居られることと思ひ、それは近代人が  
謂ふ所の「科学」といふことである。科学は  
須佐之男命が千座の置戸を置足らばすべく科  
(オホ)せられた科(トガ)の學問である。  
それはキリスト教で言ふならば「アベルを殺し  
たカイン」の學問に相當するものであるが、そ  
れは「ウ」言葉である萬有の相を分析し更に  
分析して、その萬有の事象の一番先端の部分  
を究めやうとする學問であつて、「ウの兎(サ

の、神壽(カシ)を狂はし、要壽(カシ)を壽(カシ)  
(モトホ)し、敵(カシ)を御酒(カシ)で、酒(カシ)を  
せ、(カシ)神(カシ)を御酒(カシ)で、酒(カシ)を  
大國主命の項(カシ)の神、石立たす少  
名御神は、葉(カシ)はじかれて常世の國に赴  
れた。石立たすは五葉立たすで、少名は若  
い名であるから、少名考とはアイウエオの五  
行思想のことであると考へてよい。葉の神の  
カシは稲穂田垣のクシであり、佛教の葉師如  
來の葉であり、またクシは九條にも通じて  
九條の理(カシ)を以てマロゴスを掲げり  
整理する方法である。少名考命、仕事はその  
ロゴスを學問的に整理すると共に、現實に葉  
草や酒を醸みんで、その酒に酔つて、言葉の  
原理を歌ひながら踊りながら、言祝(コトホ)  
を言ふから、その法儀を宣伝して歩いた宗教的  
な神であつたと考へられる。神の言葉は——  
生命の樹の葉は萬國の民の心の痛を癒やす、  
酒や葉草は肉體の萬病を癒やす。斯の如く少  
名考命は酒の神であり葉の神であつた。

日本の漢語漢字の間に太古日本に少名  
考命の「酒」といふものがあつたといふ言ひは  
ヘがある。この神法の内容は現代の分析解剖  
的の医学とは趣きを異にする、総合的な生命  
的の医学であつたらうし、その神法は特に葉  
草の療法に於てゐる言ひられるが、然し此  
の神法は神代既に日本にその伝を絶つた。然  
しその神法の一部は支那に伝へられ、本草  
学や素問・靈樞經の古代の自然科学、医学と  
して發達した。而して是等の學問が上古以来  
日本に逆輸入されたものが現在の日本の漢法  
医学であるから、その元は日本から行ったも

「カチ／＼山」で兎が燧石を搦つて火を用  
ひたといふことは人類の文化史上此の上なく  
重大な事柄の一つである。そこで兎の正体を  
明かしてしまへば、もはや諸君も既に兎が付  
いて居られることと思ひ、それは近代人が  
謂ふ所の「科学」といふことである。科学は  
須佐之男命が千座の置戸を置足らばすべく科  
(オホ)せられた科(トガ)の學問である。  
それはキリスト教で言ふならば「アベルを殺し  
たカイン」の學問に相當するものであるが、そ  
れは「ウ」言葉である萬有の相を分析し更に  
分析して、その萬有の事象の一番先端の部分  
を究めやうとする學問であつて、「ウの兎(サ

文明は人類が火を發見し、火を使ふことを  
覺えたことより發祥したと科学者は言ふ。正  
しく一面の真理である。だが文明が現象的な  
ヒ(火)のみから發生したといふ考へは、そ  
の同じ(ヒ)の自覚態である知慧の本質  
の言語(言葉)といふものの存在を忘れてゐ  
る唯理論のみに定着した片手落ちの考へ方だ  
であると言はなければならぬ。然しとて尙も  
「火」を使ふことが兎の學問の行き方である。  
古代日本語では「ヒ」であり、火もヒである。  
いづれも物体の「乃至エーテル」(波動)であ  
る。靈の本質を確したのは伊弉諾大神であ  
り、靈の取扱方の完成態が天照大神である。  
火を用ひるは須佐之男命である。太古  
日本の高天原を遷徙して、朝鮮を経て支那に  
渡つた須佐之男命學派の人々は、此の火を用  
ひて破産を焼き、水銀を煮て所謂錬丹還金の  
術に腐心した。此の古代支那に於ける原始的  
科学がやがて歐羅巴に興隆した近代科学の歴  
史的淵源である。この事は前号で詳述した。  
燧石と鋼を打合せて火を鑊る音は「カチ／＼」  
と言ふ。火を鑊つて、火の學問を究めて、  
これによつて神の道すなはちロゴスを明かにす  
ることが須佐之男命の兎の學問である。この  
様にして火を用ひる術を知つてゐる兎の科学  
と、天照大神のロゴスの御嘗田の時間空間  
の田の原理を破した觀念論である狸の學問  
とが「カチ／＼山」で術比べをやつて、狸は

のであると言はれてゐる。聖者も長に神聖法  
医学の終極の動きと古事記に合はせればから神  
聖を説くものである。言葉と漢字の十二経とは  
一致するものであることを確かめてゐる。言  
聖学はすなはち生命学であるから、それがそ  
のまま医学であると言つてよい。後(イ)学  
は漢法からすれば胃(イ)の學問であると言  
へる。胃は脾であり、脾といふ文字は脾(低)  
い肉と書くが、五行をマオウエイの順に取る  
と、地の位であるイ言聖は一道依り所にある。  
これは「天善果命」の位置である。古代支那  
人は彼地で「結繩の教」として傳へられた言  
聖学と生理学とを合せて此の文字を創つた  
ことが考へられる。

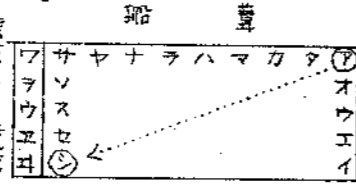
少名考命の酒を飲めばそのまゝ葡萄酒の酒に酔  
ひて醜の歌を唱ひ歩いた古代ギリシヤのバツ  
カナリアである。このバツカス(デイオニソ  
ス)の宗教がエペウスと結び付いたものがキ  
リスト教であるといふ説がある。キリスト教  
もまた葡萄酒の酒を用ひてゐる。日本、支那、  
ギリシヤ、ユヅヤの太古を驚くべき思想の  
流れは須佐之男命、月讀命であるが、その思  
想の流れの中の比較的上古に近き部分の動き  
として少名考命の存在に留意しなければなら  
ない。  
右の御酒にもある通り「カチ／＼」の御酒は、吾が  
御酒をらすしてあるから、それは日本末の  
學問ではない。少名考命は常世(夜見)の國  
にあつて活動してゐたのであるから、ギリシ  
ヤの酒神バツカスと深い関係があることが考  
へられる。古代ギリシヤと日本の関係は、木  
村鷹太郎氏が「神代史」で述べたことである。

氏の著述によると平安朝の頃「百舌若大臣」の物語が日本に行はれた。この物語はギリシヤのユリシウスの神話と其の名も内容も同一であり、ユリシウスの神話の「百舌若大臣」の物語とあるといふ。この一例によつて見ても、神代および上古、中古に於ける日本とヨーロッパとの関係は、非常に緊密なものであつたことが想像される。少名彦神と百舌若神とが同一神であるかどうかの論議は置かざるが、すくなくとも同一の意義を有する神であることは確實である。ペリカスの海遊り酒造りの宗教と学問の展開がやがてヨーロッパに於ける近代科学となつて開花したものであると言ふことも出来やう。以上大雑把な説明と恐縮ではあるが、前道の上には誤りはないと思ふ。須佐之男命、月讀命、稻葉の白彦、大國主命、少名彦命、それにバツカス宗とキリスト教といふ一連の歴史と理の上の関わりから考へて行くところ、かち／＼の兎が葉實(葉師・匠師)になつたこと、理由の大凡が了解されやう。

時は末法の世の終りに近い或る日のことである。昔から是からの話しの筋道は作者菅公の意図からするならば、將來起り得べきことに對する豫言にあらむわけである。さて、その葉

意の兎が狸の背中に塗つた「唐辛子」であるが、唐(カラ)とは所謂唐天竺のカラを指す。然し此の場合に於て作者が予言的に指示した唐とは東洋の唐天竺よりも更に遠い地域と考へた方がよい。それは即ちヨーロッパの事であると取らう。葉師すなはち科学者であるが用ひた救世理(ハクスリ)であるところの唐天竺よりも更に遠くの唐國の事(カラ)の子とは、その唐國の思想の産物の謂へ、すなはちそれは、一千年前に日本の菅公が、既にその頃からいづれ唐國に學ぶことを豫想してゐたところの近代科学を意味するものと取つてもよからう。

今こゝで幾と筆を以て即座に論理することを出来る。その他「天の鳥船」獨無所聞の船等々、古代の記録に船といふ言葉があつたからすべてを一應五十音圖のことと取つて誤りはない。



船は容けて傾けて沈んでしまつて、とうとう、理は成へない最後を遂げた。先づ此の「舟」といふのは五十音圖のことと承知しなければならぬ。その昔、水陸子命を乗せて流した「葉船」は下から始まつてに終はる五十音の配列を示した四角形である。

今こゝで幾と筆を以て即座に論理することを出来る。その他「天の鳥船」獨無所聞の船等々、古代の記録に船といふ言葉があつたからすべてを一應五十音圖のことと取つて誤りはない。

兎が舟を作つてゐる。一艘は泥の舟である。一艘は木の舟である。やがて船が出来上つたので、或日兎は海に魚を釣りに行かうと理を誘つた。二匹は天の舟に乗つて海へ漕ぎ出した。兎の舟は泥舟である。兎の舟は木の舟である。やがて二艘が沖合に出た時、兎の泥

船は容けて傾けて沈んでしまつて、とうとう、理は成へない最後を遂げた。先づ此の「舟」といふのは五十音圖のことと承知しなければならぬ。その昔、水陸子命を乗せて流した「葉船」は下から始まつてに終はる五十音の配列を示した四角形である。

今こゝで幾と筆を以て即座に論理することを出来る。その他「天の鳥船」獨無所聞の船等々、古代の記録に船といふ言葉があつたからすべてを一應五十音圖のことと取つて誤りはない。

兎が舟を作つてゐる。一艘は泥の舟である。一艘は木の舟である。やがて船が出来上つたので、或日兎は海に魚を釣りに行かうと理を誘つた。二匹は天の舟に乗つて海へ漕ぎ出した。兎の舟は泥舟である。兎の舟は木の舟である。やがて二艘が沖合に出た時、兎の泥

子の名をとりべきは学の名に非ず

と言ったが、この名分とは「名の名とすべき  
常の名に非ざる真の名」であると言はなければならぬ。眞實の上にも正しい大義名分を有らしめるためには、先づその理を究はめ性を盡すことが先決問題である。然る後にウナバ  
ラと古代日本語で言ふ所の萬有の名(言語・名分)の世界が完成される。この名分の完成が開放で言ふ法界成就の究極の姿である。汝が命は海原を知らせしと伊弉諾大神から命せられた如く、この萬有の名(言語)の完成のために努力し、その名の世界を統率する任に當る者が須佐之男命である。即ち須佐之男命は大家名分の神であり、そのためには理を究はめ性を盡さなければならぬ。この須佐之男命の努力の発展が稲葉の白鬼であり、大國主命・少名彦命の経営となるのである。稲葉の白鬼も、その始め須佐之男命は物を破壊する罪のために高天原の世界から放逐されて、萬有の千座(道の座)の置戸を置き足すことを科せられた神であるが、この神から發して今日に至るまで數千年の歴史の間、客観世界に於ける萬有の理を究はめ性を盡さんために營々の辛苦を重ねて来たところの人類の思想の唯物的半面が科学である。科学者が理を究はめ性を盡す所以は萬有の命(名・ロゴス)を明かにするに在り。稲葉の白鬼も、「かちく山」の鬼も、鬼が有製であるからにはそのことを以て天職使命とする。

萬有の理を究はめ性を盡し得る道はこの有製の方法である科学以外にはない。徳川時代の日本人はその頃輸入されたヨーロッパの物理学を究理の学と呼んだが、その究理の道に於て物質構成の理の堂奥に突入したのが今日の理論物理学である。稲葉の構造の閣明は理を究めんとする最後の管みである。今日の物理学は此処まで進り着いてゐる。あと一歩進めば天命であるロゴスの全高を現象世界に於て明かにする境域に達する。この様を段階にあるのが有製きの学問の現状である。これに及して田代氏の学問は依然として昔のままの觀念論や表象(繪姿)の中で躊躇してゐる。新らしい觀念や表象はコイテエが既に否定したところであるが、現在では宗教家達は假象の觀念としての神の御名を言ふ偶像を立てて、実在と実相から遊離した議論や感情的信仰に右往左往してゐる。あるひは日本の言ふならば、天皇個人乃至その血統を國家の元首にしてみたり、民族の家長にしてみたり、國家の象徴にしてみたりして混迷を續けてゐる。神佛の實體であるロゴスを、すなはち天皇が知食す天命(言の葉の誠の道)を証明し補佐するものはそれ等の中途半端の觀念論や感情的信仰に過ぎないところの田代氏もその神道や開放ではなくして、萬有を分析するとその究理の学問である究の科学である。故にこれを須佐(皇位)之理命といふ。皇(スメラギ)も佐(助)ける義である。斯くおかしきまに言及する所以は、筆者の一時の思ひ行きや世評からではない、一千二百年に於ける國体神道の泰斗であり、此の物語りの作者

であつた菅原道安が、既に此の様に明言してゐるのである。しかも道安のこの言をすべからざる。筆者はその言を現代人に判るやうに現代の言葉で以て説明してゐるに過ぎない。海原に於ける魚(性命)釣りは免と程の最後の術比である。然し天照大神・高天原の時置神と位置神の御當田の理法に合致しない理の泥船では正しい魚(名)は釣ることが出来ない。大義名分を明かにし得ない。若し衆生が此の泥船に乗つて彼岸の理想世界へ渡らうとしても、理と共に海の底に沈んでしまふより他はないのである。然るに免の木(船)の学問といふものは、緩返して言ふが、遠い時代に於て天照大神の御當田の開放を治理めして、天照大神とは正反對の方向に向つて研究を開始した須佐之男命が千座の置戸を置き足すための科の学問であるわけであるが、須佐之男命の數千年に亘つた経営が既に完結せんとしつゝある今日の時代に立つて改めて振り返つて見ると、その須佐之男命の叛逆は叛逆ではなく、その罪科は罪科ではない。高天原の言論によるところのもので、それは神の経綸によるところのもので、それは高天原の言葉の世界以外の方法によるロゴスの再検討の学問であることが明かになつた。すなはち免の木(船)は究極に於て高木神の船の内容を現実界、現象界に於て、現象物を材料として組立てやうとするもので、天照大神の御當田の原理と實は同格の意義を有するものである。宇宙を心として見やうと、物として見やうと、見らる所の対象は同一の生命

である。従つて心と鬼、物と鬼を研究の結果が同一帰結を得ることは当然のことではなかりはならぬ。すなはち天照大神(天皇)の知食す言の葉の誠の道は生命の自覚としての理性に立脚して道を明かにしたものである。須佐之男命の鬼の科学は主観と悟性に立脚してその道(ロゴス)を具體的現象的に証明する学問である。

と考へてもよいが、またお婆さん(蘇我)の考へる中にも、お婆さんが蘇我へつてお婆さんの中に蘇我は来て来た証據であるとも言へる。と言ふけれども、筆者個人としては、蘇我や神は乃至宗教神道に對して何等の感もあつたわけでもない。それのみが却つて宗教から神道から山程の恩恵に預つてゐる筆者である。その恩恵の恩恵に預つてゐる筆者の原理も知り得たわけであつて、その恩恵に感謝すればこそ眞實な眞實として証明するのである。

運の折角の運動も、時代が経つて従つて、その後継者達がまた本山や教会に立く護つて民衆を引く運はすやうになつた。しかもこれと同時に、愈々皇祖の御経綸の時期になつた。と所在と立立し紛糾してゐる。これが日本の宗教界、思想界の現状である。これでは何時まで経つても同じことの繰返しの過ぎない。一般民衆は何時までも浮き時がない。そこで今回は、愈々皇祖の御経綸の時期になつたため、日蓮もそして恐らくは蓮もも親鸞も知つてはゐるが、その當時は遠慮して置くことを控えてゐた所の、神と佛と生命に關する意義の全部をさらけ出して、世界の民衆の全部が、老若賢愚の差別なく誰にでも、神や佛や生命の意義を、すなはち天皇の本當の意義を、誰の教化も指導も受ける必要なく、また何を信仰する必要もなく、みづから理解することを出来るところの最も容易な、最も簡單明瞭な学問の方法を明かにして、精神の言はず政治的と言はず、乃至物質的と言はず、此の世界からすべての特権者、独裁者、隠匿者がなく、すべて、世界民衆のすべてが唯一共通の智慧の光に照らされる故に、民衆のみならず、みづからの自覚と工夫と相互の協力を以て、この世界の頂上を成してゐる全世界の文化を築いて天國海上の莊嚴の宮にまで上げることが出来る人類生命本具の方法の意義と内容を皆宣揚することが、世界唯一共通のロゴスの学問であることと、言の葉の誠の道(生命・神の道)の民衆運動としての一面であるのである。この運動の指導原理が「言の葉の誠の道」であり、現象の裏付けと証明が科学

このやうにして有製きの鬼と田代氏の理が現実の海原に於て術比の学問比を行つた時、理の学問は完全に敗北して海原の底に沈んでしまつた。鬼は首尾よくお婆さんの敵を討つたことが出来たのである。「かちく山」のお婆さんが人ばその昔にお婆さんである天皇と仲よく暮して、その天皇を輔佐し、その意義を説明するたのめ、またそれを實際の政治の上に用ひたための直屬の学問であつたが、上古の理の思想が日本には入つて来たために理に殺されて、その跡を絶つた。故にその間諜くとも二千年の間お婆さんの学問は、特殊の優秀な賢人が悟る以外には知る者が居なかつた。その間一般の佛教者は理として緋の衣を着て山門の中に飯を返り、神社や宗派の神道家はこれに似た顔の姿になつて白衣を着て御幣を取つて得意であつた。御幣を取つて魂を被ひ清めただけで、その清まつた身心に言葉の響き(靈注き)をすするだければ、折角の理を科して置きたがらぬ(田代)を諷かめると同様である。雜草はあつたらぬに生えて来る。然るに近代に及んでロゴスのいふ一つの証明方法である究の科学の証明によつて、その據つた土、泥船の哲学は海の底に沈

んでしまつたのである。鬼である須佐之男命が皇(ス)も佐(助)けるといふ御名の通りお婆さんのためにお婆さんの敵討ちをするとは、昔語りや物語りではなくして、正に今日、現在現実の事實である。鬼が敵討ちをして呉れればお婆さんの魂も成佛して蘇生へることにならぬ。筆者が此の様に此の物語りを説き得る所以は、鬼の敵討ちの仕事の一端と考へてもよいが、またお婆さんが蘇生へつてお婆さんの中に蘇我は来て来た証據であるとも言へる。と言ふけれども、筆者個人としては、蘇我や神は乃至宗教神道に對して何等の感もあつたわけでもない。それのみが却つて宗教から神道から山程の恩恵に預つてゐる筆者である。その恩恵の恩恵に預つてゐる筆者の原理も知り得たわけであつて、その恩恵に感謝すればこそ眞實な眞實として証明するのである。

理の道が今日まで大本山の伽藍や神社や宗派神道の殿堂に納まり返つて、民衆を引く運はすことが出来た理由は、神や佛である生命の原理といふものが一般の民衆に判らぬものがあり、特殊の学問や靈能のみにたつたか判らぬものとされてゐるからである。このために或は教祖教主とか管長とか法主、法王などと云ふ特権階級が發生して、精神界の道と権界の階級となつた。然してこれでは道本来の意義に及するから、宗教を本心や法を本心から引き下ろして、もつと民衆に身近なものを、親しいものに直して直したのが、親しい道、道元やルートルの宗教運動であつた。然るに末法の時代の初期に於ける是等の聖者

である。

X

鬼は狸を海の底に沈めて、首尾よくお婆さん  
の敵を討つと、早速にお爺さんを訪ねて、  
敵討ちが済んだことを報告した。お爺さんは  
鬼の報告を聞いて喜んだ。それで此の物語り  
は終りである。以上「かち／＼山」の伝説の  
意義を一言で言へば、観念的な哲学や宗教に対  
する科学の勝利といふことに帰結する。しか  
も科学が勝利を得たといふことは、たゞに宗  
教に打撃したことに止まらない。鬼がお婆さん  
の敵を討つたといふことは同時に此の敵討  
ちによって天皇に附属する言葉の道の学問を  
再び世にあらはし、従来は鋭敏な知的直観を  
以てしなげは入り得ない学問であつた神の  
値の意義を、具体的を現象物に即した科学に  
よつて証明するといふ意味が寓されてゐる。  
現在宗教家達の或者は科学に背向けてこれ  
を白眼視する。或る宗教家は世に科学に阿諛  
してこれに妥協を申上らうとする。哲学者達  
は大汗をかきながら科学の歩みに後れまいと  
息せきせき切つてゐるだけである。

然し科学は此の様な宗教の敵視をも嬌態を  
も遺憾をも何等顧慮する必要はない。たゞひ  
たまたま自己の方法と天職に忠実でありてハ  
すればよい。従来、狸の思想に躊躇してゐる  
限り佛敎やキリスト敎や神社神道や宗派神道  
や主助けることが科学の天職ではなくして、  
却つて是等の思想の不明瞭さを徹底する徹底  
的の検討批判することがその本来の爲業であ  
る。それと同時に繰返して言ふがその科学独

独の悟性的学問によつて人類生命の至上命令  
の自覚であるロブスの言の葉の道さ、即ち前  
述した男命や女命としての「天の命」を証明  
すること、科学の究極の目的である。これ等  
の事柄を別の言葉に言ひ換へて説明すれば、  
現在教会に行はれてゐるキリスト敎の迷信を  
打破して、直接に「天に在します父の名」を  
明かにし、エデンの園の科学的構造の合理性を  
當徳を証明すること、科学の使命である。そ  
れは同時に寺院の神教の生運を警告し、皇  
族に「禍胎四十八願」の内容の合理性の裏付  
けを行ふことであり、神社や宗派の神道の神  
支拂のものを孤立糾弾を拂して、直接に「天  
の巻戸」の科学的内幕を顯明することである。  
エデンの園も洋土の社屋も乃至高天原の天  
巻戸の内幕も、歴史的にも理論的にも天を別  
箇のものではなくして、同一にして唯一であ  
り、世界人類に普く共通するところの「神  
即言葉の道」である。ロブス(吉野)の時間と  
空間に於ける体系と展開に他ならない。科学  
をも含めた世界人類のすべての思想はこの唯  
一のロブスによつて整理され、これに帰一す  
る。

この故に此の物語りの最後に鬼が再びお婆  
さんへ家を訪ねて敵討ち完了の報告をしたと  
いふ一筆は趣々に番國出来ぬ意義がある。  
その報告(カハリゴト、復命)として鬼はお  
爺さんに向つて、「かち／＼山」で燧石を用  
ひて火を点じたことから始まつて、唐辛子の  
葉の製法方法から、最後に木の樫を作つた作  
り方までを精しく説明しなければならぬ。  
すなはち有様き。科学の学問の全内容を挙げ

得意になつてゐる人達が、その時が来た時物  
の役に立たなく取捨し思ひをしないやう  
に今のうちから、今から早速に団体神道の勉  
勵をして置きなさいと言ふことを勧めるため  
に、実は筆者が斯うして筆を呵して説いてゐ  
るのである。

斯くてロブスと科学との間の苦むが完了し  
た時、人類の文明は如何なるかと言ふこと、  
その時は神即言葉であるロブスの道がカント  
の所謂生命の至上命令の自覚の学的内容とし  
て昔々人類の社会生活、国家生活の最高の  
教範となる。それと同時に科学は形而上のロ  
ブスからその学問の裏付けをされることによ  
つて、その学問の全体系の上で天運無窮・萬  
世一系の意義が附與されるのである。斯くの  
如くして物(物質)は心によつて裏付けられ、  
同時に心は物によつて証明されて、表裏が完  
全に一致した生命の、すなはち世界文明の全  
一的体系が完成する。この完全無敵な文明の  
体系が世界の恒久の平和の基礎である國際義  
法である。

元來人類は進化論的な太古に於て、猿類や  
猿への境涯を離れて知性の自覚を發祥して以  
來、今日に至るまでの間に、下つた二つの仕  
事しか成し遂げてゐない。而して二つだけであ  
る。その一つは生命の自己認識の内容である  
ロブス(言葉)の学的体系の完成である。不  
古、キリスト敎的に言ふならばエデンの園の  
時代に、儒敎的に言ふならば先王の時代に完  
成された此の言語即道の学問の全内容は、日  
本の天皇が皇室の秘宝として、神代以來安全  
に所持し保管して今日に及んでゐる。いま一

てお爺さんに報告しなげればならぬのであ  
る。お爺さんは天照大御神であり、鬼は須佐  
之男命である。天照大御神の实体は言葉の道  
であり、須佐之男命の实体は科学である。科  
学が言葉の道に對して復命すること、  
吾輩がその言葉ロブスと斯うして科学とが各  
々の学問の内容を照合検討することを「天の  
誓ひ」と言ふ。

この「天の誓ひ」の意義を民間の雑事とし  
て取扱つたものが、七月七日の「七夕」(タナ  
バタ)の行事である。これに就てはいつぞや  
詳説したことがあるが、天照大御神は時空の  
終極の糸を以て五十音図の神衣を織る織女星  
であり、須佐之男命はウ言を徹底させる神  
とシメ牛(ウシ)に象徴された牽牛星である。  
天潢(天の川)は天支安河であり、キリスト  
敎が言ふ生命の河である。この河を渡すとい  
ふ(カササギ)の橋とはカササギハマヤラ  
といふ八つ父の音のことである。やがて人類  
の科学が、高天原の言の葉の道の前に登り上  
つて来て、双方の学問の全内容を披瀝して照合  
検討し合はねばならぬ時が来る。その時が来  
ることを祈願し祝福して、東洋の子を運ば  
返して来た。その時は間もなく来る。その  
時が来る時は世界中の科学者が日本に集まつ  
て、日本の皇室直屬の学問である言の葉の道  
の道さとして科学の全体系の検討整理が行  
はれる。だから現在に他愛もない動物の葉  
六段を誇つたり、教團の財産を自慢したりし  
て、観念論に耽りながら神道者を御座いと

科学の性質は物質(ウ)を分析することによる  
科学である。その科学はその数千年の長きに  
亘つた研究を今日終りに完結せんとしつゝある  
人類の事業はこの二つだけだ。これ以外には  
何も無い。物と心と言ふ二つの字は非証  
法的な正と交をなすものであつて、この正と  
及かが唯一の生命自体のうち組織綜合され  
場集されることを以て、人類の文明は完成す  
るのである。

しかるに此の科学がやがてロブスによつて  
相互に裏付けられ証明せられて天運無窮萬世  
一系の生命が附與された時、科学が新しい如  
何なる活動を開始するかと云ふこと、今日まで  
の所謂分析の学であつた科学が言はばロブス  
ニカス的の大転回をして、分析の科学から一  
転して綜合の科学となつて新想の發足を始め  
るのである。綜合の科学を古代日本語を以て  
言へば産靈(ムスロ)の科学と稱し得る。巻  
初に説いた如く宇宙に遍在する光りを頭腦の  
自覚内容として結合させて四離無碍な生  
命の道義を完成した人類は、今またそ  
の同じ光りを客觀的現象世界の具体的映像の  
の裡に結合させて、物質原素と化合物とを  
同じく円融無碍に生産し得る自由を獲得せん  
としつゝあるのである。その光りを結んで原  
素と物質を生む具體的な操作を編み出すため  
の術型であり、指導原理となるものは、その  
同じ光りと密に思想を産み出す道である  
「言の葉の道」そのものでなければなら  
ない。

以上「かち／＼山」の物語りの解説を試み  
て、意公が言はんとした内容を通り越して、

その先を説いてしまつたが、意公の靈も定  
めし微笑してゐると思ふ。

あとがき

小沢俊郎君が又し振りて遊びに来た。小沢  
君は東大の旧制の佛文科学科に在る。筆者  
は、自分が見られぬがた身を自分の子供に  
思ふ。俊郎君は京都三高から東大文科に入  
れた。俊郎君は数年前のうちに高校生から大  
生に、大学生から最近ではみづから恩師が  
お學者にならうとしてゐる。去年の夏は西  
産と軽井沢で過した。春休みに何かへ旅行  
したいと言ひながら、奥伊豆へ行くと勧め  
た。筆者の学生時代、春の奥伊豆はよかつた。  
湯ヶ島・湯ヶ野・土肥あたり、宿の窓に山櫻  
が散り込んで、何處でも鶯が鳴いてゐた。三  
十年前の昔の僕が今残つてゐるだらうか。

小沢君がフランスのマラルメやカポレル  
の詩や、サントルヤカミユの詩をしして呉れ  
た。筆者は吹田順助博士門下の独逸文学系統  
だからフランスのことにはよく知らぬが、フ  
ランスの詩人達が如何に言葉といふことに就  
て苦心してゐるか、小沢君の語してよく判つ  
た。マロレーデによる「Cogito ergo sum」  
といふ言葉は「僕に考へる」といふ意味だ  
うだ。僕に考へるとは神と共に考へることだ  
であり、生命自体となつて考へることである。  
ここに詩の淵源があると思ふ。小沢君が



# 神

# 業

第九号

昭和二十八年十月

皇學研究所

言ふ。小決者の思索の方向は正しい。

世界中で一番早く日本の学問を理解せしめる  
國はフランス人らしい。パリの文人や藝師  
家達の生活は日本の平安朝や江戸時代の文人  
の生活に似てゐるらしい。生命といふものの  
味はこの奥に没入するたけには一面さうし  
た所謂風狂の態度も必要である。ホドレー  
ルの方がトルストイより遠かに英敏なクリス  
チヤンであると言者はよく若い人に話す。詩  
情を解する者が文明人である。フランス人が  
民族的に世界で一番文明人らしい。次が支那  
人である。独逸人、米國人は依然パウエルで  
ありフアイマーである。日本人は言ふと現  
在は江戸時代、平安朝の日本人さへ跡を絶つ  
てゐる。況んや萬葉時代の日本人に於ておや  
である。神代の日本人は今血液の中に潜在し  
てゐるだけである。

筆者は小決者に言葉を説いたことではない。  
言葉を聞くよりも、その前にどん／＼文学の  
世界、特に詩の世界に没入して貰ふたいから  
だ。言葉は詩の果てである。和歌の道を教  
の道、言の葉の誠の道と言ふのである。國體  
の堂奥に入るには歌心の修練を以て第一と  
する。

フランスの政治家には詩人が多いやうだ。  
確かに文明國の所以である。独逸では政治家  
が詩人だか詩人が政治家だ。筆者は独逸文学  
でケイテだけしか学ばなかつた。日本の政治  
家で詩人である人物は平安朝以後、宋朝ある  
のみと言つてよい。日本の國體学は詩の極地  
であり、即ち文明の極地である。天澤太祝詞  
は最高の詩である。言葉を以て表現し得る人

類生命の最高の祝福の詩が天澤太祝詞である。

改に太祝詞は文明の最高の祝福の詩である。  
今日の日本文人に國體が理解されてゐることは  
方がないことだ。源流と風俗と人情と義理と  
いふ感情と知性の線細を盡して、そのすべて  
を最大に包含してまとめ上げたものが言葉學  
であるから、詩が判らなければ言葉は判らな  
い。言葉はウ(有)の田(ア)すはち歌の  
學問である。筆者は今日まで多く日本の神祕  
的宗教家や右翼者に向つて言葉を説いて来た  
が、その方面に於ける理解者も協力者も絶無  
である。主観的な感情を駆り立てるだけの神  
祕家や、野蠻臭い觀念右翼者が彼等の立場を  
固執してゐる間は、風雅の極地である國體學  
の門に入ることは不可能である。何時までも  
國體の周圍でワイ／＼騒いでゐるだけで中へ  
は決しては入れない。

筆者自身は然し、さうした神祕的經驗と、  
觀念的國體信仰を捨てやうやく言の葉の誠の  
道に辿り着いた人間である。だから筆者が二  
十年前に通つたところの同じ場所を今に訪  
復してゐる人達を見るとき、早く其心を通り抜  
けて、此心へ出ておいでなさいと勧めます。居  
らぬないのが人情である。だが筆者が熱心に  
勧告すればする程却つて彼等は吠えたり噛み  
付いたりする。さう言ふ努力は無駄だから止  
せと先輩からも忠告されてゐる。彼等の境涯  
を彷徨することの修業の過程ではなくして、  
其心を彷徨すること自体が一生の仕事である  
筈な人も多く居るわけだ。それにも天命があ  
るのだから。既に説くだけは説いてあるのだ  
から、これ以上聞く心のない者は向つて説く

これは言ひたい。道があると言ひたい。道が  
あると聞いたら即座に  
二十年前足らずの間自分は言葉の道を學び  
つて来た。今も「神日本」「皇道日報」「皇  
道世界政治研究所」「神代文化研究所」「皇  
道研究會」「明生會」等々、自分が説く道は  
在舞台は色々あつた。だが笛を吹いて踊つて  
呉れさうな人達も多く戦犯にされたりして死  
んでしまつた。今から思ふと戦犯で死んだ人  
達とはも南も優秀な人物であつたことが考へ  
られる。最近では愈々日本に人物が居なくな  
つたらしい。同志と思ふ人さへ最近では殺され  
り裏切つたりつまたぬ反抗をせしめられて遠  
くしてしまふ有様である。

だが此の様に日本人が精神的に駄目になつて、道を壊めることが困難であらばある程自分は神の恩寵を切實に考へる。困難であればこそ神が、運命が、歴史の必然が自分を選んで此の使命に任じたのであることを思ふ。さう思ふと何時も新しい勇氣と希望が湧いて来る。自分は是から學問修業をして天國や極楽へ行かうと言ふ人間ではなくして、道を迷へん人達のために神から遣はされて天國から来た人間であることをしのみ考へる。パンフレットは續けてやる心算だ。書いては置いて置きたへすれば、今読む人がなくとも、讀む人は後から出て来る。讀まぬはならぬ時が来る事が判つてゐる。

「大神業」第八号、昭和二十八年四月、非賣品  
日本聖言言靈研究會  
世田谷区松原町三丁目八四二番地、小笠原方